



ホームに見送りはいない。

当然だ。今日、この電車で行ってしまうなんて、誰にも伝えていなかったから。

ボクは窓を開けて2番線の白いベンチをじっと見つめていた。

入学して1年。やっと学校や先生たちにも慣れてきたのに、東京の学校に転校だなんてひどいよオヤジ。

仲のいい友だちもできたところなのにさ。

そのとき、ベンチに舞い降りたハトが、ボクを見て少し首を傾けた。なにをそんなに悲しんでいるの、とでも言うように。

この学校の友だちが、友だちじゃなくなるわけじゃないのよ。

それに、あなたには次の学校があるじゃない。どんな楽しい仲間たちが待っているかもしれない。さあ、新しい友だちを探しに行ってみよう。

ハトはもう一度首を傾げ、ぴょんぴょんと2回跳ねてから、屋根の向こうへと飛んでいった。

発車のベルが鳴った。

目を閉じて大きく深呼吸をする。

みんな、手紙書くから。

東京は晴れてるといいな。

新しい年

久しぶりの二年参りだ。
受験生だった高校三年のとき以来だから、ちょうど10年になる。
なんとなく、ほんとうに気まぐれで、近所の神社に出かけた。

彼女は打合せどおり、コンビニの前で待っていた。
着物姿が馬子にもなんとかだが、それはそれで、入口の「おせち料理承ります」のポスターと妙にマッチしている。
「なにをニヤけているの」という彼女の声で現実に戻った。
「別に」と答えながらもほほが緩む。

駐車場の端には、年末に除雪された雪の塊が残っている。
泥で汚れた様子が、今年の暖冬を物語っている。
雪の少ないお正月って、もう何年続いているのだろう。
コンビニの窓ガラスに貼られた虎の絵が、どこか寂しげに「今年も寒くないね」と言っているようだ。

さあ、行こう。
もうきっと、たくさんの人たちで賑わっていることだろう。
今年は二人にとって、特別な年になるね。
明けたら、おめでとう。

天窓から差し込む光がいつもより白っぽく感じるのは気のせいだろうか。

目覚まし代わりにしているケータイを覗くと、確かにもう昨夜セットした時間だ。

寝起きのためかそれとも花粉症のせいかわからない、まだまぶしくて見開くことができないちょっとかゆくなった目をこすりながら、ボクはロフトを降りる。

エアコンとFMラジオとコーヒーマーカーのスイッチを入れてから、狭いユニットバスで身体と気持ちを引き締める。

汗でべとついた肌に熱めのシャワーが心地いい。

昨日は少し飲みすぎたかな。

喉の渇きに気がついて、大きく口を開けてシャワーのつぶを受け止める。

濡れた髪を拭きながらカーテンを開けると、ベランダに置いてあるプランターのハーブがこちらを向いているのが見える。

盛夏の森のような深い緑が鮮やかだ。

ガラス越しだけれど、全身を包むハーブの匂いを感じて、なんだか気分が透明になっていく。

まだ冷たく、けれど明るく、白い朝。

一日が、始まる。

旅立ちの春に

最後のホームルームが終わって教室をあとにした。

ほとんどの教材は昨日のうちに持って帰っていたので、今日の荷物はかばんと卒業証書だけ。

だれよりも先に校庭へ飛び出していた。

サッカーゴールの後ろにある水飲み場に人かげはない。よっつの蛇口がとてもひんやりとして見える。春なのに、ちょっとさみしい。

校庭の先にある裏門には母が待っていた。

ごめんねおかあさん、寒いよね、いま行くね。

風がつめたい。けど、いまのわたしには気持ちいい。セーラー服のスカートが風になびいて、重く揺れる感覚がなぜか懐かしい。けれどこれももう今日でおしまい。

振り向いて校舎をながめる。

どこかのクラスで女子が泣いている。

3年間ありがとう。こころの中で、でも精一杯の大声で、叫ぶ。

わたし、東京の大学にいきます。

小学校4年の夏、図書館で本を読んでいたら、目の焦点が合わなくなるような不思議な感覚に初めて気がついた。

病院に行って検査を受けたけれど原因不明。ただ、視力は確実に落ちていた。

5年の秋、自転車に乗っていて歩行者にぶつかった。

小さな交差点で、右から出てきた人に気づかなかったのだ。

当時私の視力はかなり弱くなっていた。

その事故で転んで頭を強く打ち、そのまま気を失った。

そして病院のベッドで意識を回復したとき、私の目は完全に機能を失っていた。

でも悲しくはなかった。

友だちは目の見えない私の代わりに本や新聞も読み聞かせてくれた。

誕生日には毎年、差出人のない点字のバースデーカードが届く。

私は守られている。友に。家族に。いろんな人たちに。

そして今日届いたバースデーカード。こんなメッセージだった。

<二十歳の誕生日おめでとう。自分もうれしいです。あのときぶつかって本当にごめんなさい>

急に思いたって各駅停車に乗った。

大型連休。ずっと忙しくて休みの予定なんてなにも立てていなかったが、突然、ビルやネオンや騒音の街から1メートルでも離れたくなった。シーズンに一度は誰でもそう思うことがあるだろう。

行き先なんか決めてない。どこでもいい。緑とおいしい空気がほしい。少しのお金とお気に入りの文庫本をリュックに放り込み街を飛び出した。

3時間電車で揺られ、聞いたことのない小さな駅に降りた。乗ってきた電車が行ってしまうと、あとは自分と風の音だけになる。

昔の日本映画で見たことのある形をした木の柵が、ホームと外を区切っている。駅名を書いた看板の足元に黄色い花がたくさん咲いている。駅員はいない。

改札には、切符はここにお入れください、と書かれた白いポストが立っている。中を覗いてみるが、なにも見えない。切符を入れるのがなんだか惜しくなって、そのままポケットに戻す。

小さな、ほんとにこじんまりとした駅舎を抜けると、似合わない大きさのロータリーになっていた。観光バスが5台は止まれるスペースがある。だけどきっと、いままでこの町でそんな賑わいはなかったに違いない。

空を見上げると細長い飛行機雲がひとすじ流れていた。目の前には新緑に覆われた山がすぐそこに迫っている。

ガイドブックもスケジュールもない旅だ。

さて、湧き水でも飲みに行こうか。

今日の思い出

男の子が泣いていた。

いや、正確には、泣くまいと歯を食いしばっていたのだ。

ジャイアンツの野球帽を少し深めにかぶり、自分のつま先を見つめるようにしてうつむいている。

よく見ると、小さな肩が小刻みに震えているのがわかる。

小学校2年生くらいだろうか。

それでもゆっくりと歩き進んでいたのだが、ゲートを出たところでついに立ち止まってしまった。

下唇を突き出し、奥歯をかみしめ、いまにもこぼれ落ちそうなほど大粒の涙を溜めている。

もっと幼ければ大声で泣きわめくことも許されるだろう。もっと大きくなればしたたかにゴネてみせるだろう。

しかし彼は、ひとりじっと悲しみに耐えていた。

帰りたくない。でも帰らなきゃいけない。

ママが言う。「楽しかったね」

パパも言う。「またいつか来ようね」

そこは夢と魔法の王国のエントランスゲート。

たったいま体験した夢のようなできごとを、思い出に焼きつける場所。

『僕のおじいちゃん』

じいちゃんは不思議な人だった。

僕が小学2年生のとき、学校で父兄参観があったのだが、両親は姿を見せなかった。
当然だ。うっかり者の僕は、1週間前にもらっていたご案内のプリントを母に見せるのを忘れていたのだ。

けど、なぜかじいちゃんに来ていて、教室の後ろでニコニコしながら僕のほうを見ていたことを覚えている。

中学生のとき、登校途中で犬に吠えられ、持っていたお弁当をぶちまけてしまったことがある。
その日は一日お昼ヌキかと観念していたのだが、4限が始まる直前に、じいちゃんが菓子パンと牛乳を差し入れてくれた。どうしてお弁当のことを知ったのか、いまだにわからない。

高校のとき。

大好きだったロックバンドがあった。でもコンサートのチケットは競争率が激しくてなかなか手に入らない。

途方にくれていたとき、じいちゃんがそっと2枚のチケットを手渡してくれた。
どうやって手に入れたのと聞いても、じいちゃんはただニコニコしているだけだった。

そしていま。

じいちゃんは棺の中で静かに眠っている。

穏やかな表情で、ただ、疲れたから休んでいるかのようだ。

なんとなく、なんの根拠も無いけど、じいちゃんは今でも僕を見ていてくれると思う。
あの参観日、ニコニコと、ゆっくりとうなずきながら、やさしく僕を見守ってくれたように。

引越し

最後のダンボールが運び出されると、まったく生活感のない冷たい部屋に戻った。
ほこりで全体的に白っぽいせいもあるのだろうけれど、6年前に越してきた当時とは違う、なんとなくグレーな風景が広がっている。

カーテンを取り外した窓の下のほうに雨つぶがあたってぽつぽつと音がする。
向かいの家のベランダに干してあるタオルと空色のTシャツが風で揺れている。そろそろ取り込まないと濡れてしまうのにな。
ほこりの匂いの強くなった部屋をもう一度ぐるりと眺める。いよいよ学生卒業か。長い間、ありがとう。
これからは学資をもらう立場から仕送りする立場に逆転だ。
おふくろ。もう、いつ引退してもいいぜ。いままで満足にできなかった趣味の手芸や旅行も、これからは存分に楽しんでくれよ。健康にだけは気をつけてな。おやじの分まで長生きしてもらわないといけないんだから。

さて、感傷もここまでだ。
リュックを右肩に回しきびすを返す。
明日からは、家族を守っていく自分になる。